

京都大学地理学談話会

会 報

第27号



2016

[目次]

寄稿

- 地理学とアメリカと私…………… 木村真紀子(旧姓:氏家)(2001年卒) 1
ライフサイエンスと地理学の迷いみち…………… 井上 悠輔(2001年卒) 3

秋季地理学談話会の報告

- 〈OB交流会〉 講師:松尾 俊明(1986年卒), 前田真寿実(2013年卒) 6
〈講演会〉
「中国の変貌と地理学研究」…………… 秋山 元秀(1971年卒) 6

研究室便り

- 〈総合博物館での地図資料等の利用について〉…………… 10
〈外国人研究者~訪問された方~〉…………… 10
〈地理学教室への寄贈図書~2015年度~〉…………… 11
〈研究室の動静〉…………… 14
〈新メンバーの自己紹介〉…………… 14
〈2015年度の実習旅行〉…………… 16
〈学部卒業生・院生等の進路〉…………… 17
〈院生の研究状況の報告〉…………… 17
〈2016年度講義題目〉…………… 17

事務局から

- 〈地理学談話会2015年度会計報告〉…………… 18
〈訃報〉…………… 19
〈住所不明者についてお願い〉…………… 19
〈オープンキャンパス:2015年度の報告と2016年度のお知らせ〉…………… 20
〈2016年度秋季地理学談話会のお知らせ〉…………… 21
〈地理学教室所蔵の写真資料について〉…………… 21

〈地理学談話会名簿改訂のお知らせとお願い〉

※表紙写真:2015年10月26日,実習旅行のおりの市内巡検(京都府舞鶴市)

寄稿

地理学とアメリカと私

米国三井物産(株)

木村 真紀子(旧姓:氏家)(2001年卒)

私は大阪府豊中市出身で、1997年に京都大学に入学した。馬術部の朝練で疲れた日は授業をよくサボっていたが、地図を手書きで製作したり GIS を使う地理学の授業はハンズオンで眠くならず楽しかった。

専攻は地理学にしようと考えていて、金田先生のゼミに所属した。2回生くらいになって専攻を決める時期に、文学部の各専攻・研究室について紹介した冊子もらった。たしか、地理学専攻のところには「旅行好きだとか、鉄道好きだとかいう理由で地理学を専攻しないでほしい」という趣旨の一文が記載されていたと思うが、地理学専攻の同期（私を含めて6人）はみんなそんな感じなのが良かった。同期は仲良く、三方五湖、大洗など色々なところに一緒に出掛けた。今でも仲が続いているのは嬉しい限りだ（同期2人とは最近アメリカで会うことができた）。

4回生になっても相変わらず馬術部中心の生活で、就活を意識し始めた頃にはすでに企業のエントリーシート受付が終了していた。興味があった ESRI ジャパンには就職を希望する旨のメールを送っ

てみたが、今年は博士課程修了者しか採用しませんという返事だった。行けるところに就職するか留年かと考えていたある日、文学部構内に情報学研究科の説明会のポスターが貼ってあるのに気づいた。社会情報学専攻なるものがあり、「防災や農学、医療などの分野で情報システムのデザインを行う」と書いてある。GIS も関係ありそうで面白そうだし、このポス



2004年、同期で集まって、翌日茨城県の大洗に出かけました（写真上：左から松井、井上、氏家、北川、福本、郡田）

ターを見つけたのも運命かもしれない、と晴れた気持ちで説明会に参加し、2001年に情報学研究科に入学することができた。

社会情報学専攻（地域・防災情報システム学講座）での私の所属は、黄檗にある防災研究所・巨大災害研究センターの河田研究室となった。津波解析を行う土木工学出身者や、洪水やハザードマップの研究のため留学中の韓国の気象庁職員など多様なメンバーがいた。当初はGISに関係のある研究をしたいと思っていたがじっくりくるテーマが見つからず、また、減災実現のためには世の中に生かされる研究が必要ではないかと思うようになり、「洪水避難シミュレーターによる防災教育」というテーマで修論を書いた。教育効果を計るため、熊野寮を訪ねて寮生にシミュレーターを試してもらい、アンケート調査を行ったのだが、洪水の危険性や早期避難の重要性がわかって良かった、というポジティブな声もあれば、クソゲーといういかにも熊野寮生的なコメントもあったのは良い思い出だ。

2003年に、三井物産（情報産業本部）に入社した。オークションシステムを設計・実装する大学院の授業でシステムが稼働した時の喜びが忘れられず、システムエンジニアを目指していたが、海外ビジネスにも興味があり、最終的に商社に行きついた。

2012年に、ラッキーなことに米国駐在員のチャンスを頂き、渡米した。現在は、米国三井物産のシリコンバレー支店で、IT

企業への投資と事業開発を行っている（例えば、クラウドストレージサービスのBox社に投資をし、日本での販売権を取得している）。米国赴任直前に結婚した主人（京大工学部卒）が、高校教師の職を辞めてついてきてくれたのは心強く有り難かった（今はサンノゼ州立大学の修士課程にて、バイオインフォマティクスを研究中）。

こちらに来るまでは、シリコンバレーがどこにあるのかも分からず、一生懸命地図で探したりしたが、シリコンバレーという地名があるわけではなく、南はサンノゼ市から北はサンマテオ市くらいまでの一帯を指す通称である（半導体メーカーの拠点が集中していたことに由来）。

シリコンバレーで働いていると言うと聞こえが良いが、オフィスにいる大半が日本人で、上司も日本人なので、日本語の会話やメールも多く、職場環境は日本とさほど変わらない。英語はもともと好きなほうだが、聞き取れない、言いたいことが英語でうまく表現できないということはしょっちゅうある。アメリカにいてだけで劇的に英語が上手くなるわけでもないの、自分への期待値を下げ、帰国子女じゃないしこんなもんだろう、と開き直っている。

アメリカに来て印象的だったのは、「まずやってみよう」というメンタリティである。敷居が低い、失敗を許容する文化とも言い換えられるが、このノリが、イノベーションを生み出す上で非常に重要だと思う。特にシリコンバレーでは、一消費者として生活する中でも、新しいサ

ービスや会社が続々と出てくるのが実感でき、イノベーションを身近に感じることができる。たとえば、Uber（モバイルアプリで車を呼べるサービス）や DoorDash（Web で注文した食事のピックアップ代行サービス）などは、シェアリングエコノミーと呼ばれる新しいビジネスモデルの代表企業で、私もよく利用している（登録した一般人が、他の一般人客に対して運転やフードデリバリーサービスを提供できるのが特徴）。

Meetup（ミートアップ）と呼ばれる会合も盛んだ。誰でも特定のテーマの Meetup を主催することができ、誰でも気軽に参加することができる。ワイン好きの集いなどの趣味の集まりもあるが、平日の夕方に開催されるビジネス関連の講演＋ネットワーキングが多い。業界知見の取得や人脈構築に役立つので多くの人に参加しているが、硬い感じは一切なく、楽しく参加できるのが良い。

私が以前参加した地理関連の Meetup は、サンフランシスコ周辺の OpenStreetMap をみんなでアップデートしようというもので、週末のカフェに PC を持参した 6 人が集まった。主催者は統計関連の仕事をしている地図好きの若い白人女性で、中学生の息子を連れて中国系アメリカ人の親子なども参加しており、年齢もバックグラウンドも異なるメンバーが気軽に集まる機会は日本ではあまりないのではと思った。他にも「iOS/Android Mobile GIS Development Meetup」など色々あり、

<http://www.meetup.com/>から検索することができる。

シリコンバレーでは、キャリアアップや自分の幅を広げるために Meetup に参加したり、平日の夕方や週末に学校に通ったりする社会人も多く、年齢に捉われず新しいことを学ぼう・楽しもうとする姿勢があると思う。私も、プライベート・仕事ともに、何歳になっても新しいことにチャレンジしていきたい。

(makiko.ujjie@gmail.com)



近所にあるFacebook本社にて

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

ライフサイエンスと地理学の 迷いみち

東京大学医科学研究所

井上 悠輔(2001年卒)

田中和子先生から、このエッセイの執筆依頼のメールを受けたのは、出張先の

ロンドンに滞在していたときのこと。その半年ほど前、私は他の教室同期と共に、福本拓氏（現・宮崎産経大）の結婚式に出席した。同期がもともと六人（上記の福本氏の他、氏家（旧姓）真紀子、北川哲也、郡田篤、松井威各氏と私）という、割とこじんまりした数であったことが幸いしてか、卒業後も何とか連絡は続いている。こうしたことが、同じく式に出席されていた田中先生に伝わってご依頼いただいたようだ。折しも勤務先の大学で准教授を拝命したばかりでもあり、卒業後の10数年を振り返るいい機会かもしれない。当教室の出身者にはこういう変な人もいるという、少し利己的な生存報告をして、与えられた余白を埋めたい。

京都大学には学部から博士修了までお世話になった。ただ、地理学教室にいたのは学部卒業までであり、大学院からは医学研究科に移り、公衆衛生学で修士、博士の学位を受けた。地理学教室に入ったのに、人生の地図の見方には随分と不案内であったが、それでもこの教室は、間違いなく私にとっての研究者キャリアの原点である。職業柄、京大には時折足を運ぶが、母校への出張はいつも楽しみで、それでいていつも一種の緊張感を覚える。

私が在籍していた当時の教室の構成は、成田孝三先生、石原潤先生、金田章裕先生、石川義孝先生であり、教室の事務として真木さんがおられた。実習の際には、博物館の佐藤廉也先生（現・大阪大学）にも大変お世話になった。学部時代の私

は問題児で、指導教員の石川先生はじめ、先生方には大変迷惑をかけた。冒頭の福本氏の婚礼の際、石原先生と当時の話題になり、大いに冷や汗をかいた。若気の至りであるが、学生の時期に多くの先生方のお話を聞き、悩んだ分、その後の自身の進路選択の際、やみくもながら大胆で、時に慎重な対応がとれたと思う。また、研究室には割と早い段階からお邪魔していたが、先輩諸氏が文献や現実と格闘している姿が深く印象に残り、今の私の研究者観の基礎となっている。

私が公衆衛生の大学院へ進学するきっかけとなったのは、皮肉なことだが、地理の本であった。デムコラの『地理の世界へようこそ』（原題：Why in the World）という本に「顕微鏡の中の地理学」という章がある。どうして特定の地域は他の場所より寿命が長いのか、どうして世界の疾患パターンは異なるのか、どうして医師は偏在するのか。長引く不景気の中、文学部生としての自分の居場所を不安に思っていた頃、地理学に大きな可能性と自由な世界があることを知り、興奮したものである。卒論研究では、明治期東京におけるコレラ防遏を素材として、都市計画と衛生思想の接点を検討した。なお、このとき検討した大日本私立衛生会（近代日本最初の公衆衛生団体）の「伝染病研究所」が、今日の私の職場である東京大学医科学研究所の母体である。

大学院では、実験研究から統計解析まで様々な手法を学んだが、どれも今の活動の糧になっている。修士の時に書いた

最初の英語論文は、東北地方のある遺伝病に関する遺伝子解析の結果をまとめたものであった。文学部の人間が、医学部の大学院に行ってやっていけるのか、疑問をお持ちの方もおられよう。これはどの世界でも同じだが、要は本人次第であって、一概には言えない。ただ、エドガー・スノーの「コレラ地図」の例を出すまでもなく、地理学と公衆衛生学とは親和性が高い。京大生の場合、文系の学部であっても、理系科目に一定の素養があるだろうし、地理学で培った統計学や調査手法の素養は、磨けば大きな武器になる。また、これは意外かもしれないが、卒論執筆の経験があることも大きなアドバンテージである。無論、本人の情熱が不可欠であることは言うまでもない。

私の現在の専門は、「研究倫理」「生命倫理」と呼ばれる、科学政策の一分野である。新しい技術や手法が社会の規範や意識に適合するか否か、またどうすれば適合するかを検討する。関連する研究室の設置が東大や京大、阪大などの医学部で相次ぐ、新興の分野である。読者諸氏からすれば、ある研究活動が社会に適合しているか否かがどうしてそんなに問題になるのか、理解しがたいかもしれない。しかし、今日の医科学にとっては切実な課題である。医学は、伝統的に人間の身体から知識を得、また新しい治療法を人間の身体で試す。こうした活動は、一歩間違えると人間を道具として使役し、虐待することになりかねない要素を有している。それゆえ、日本の医学部には「倫理

審査委員会」が設置されており、個々の研究計画が国の倫理指針を満たしているか否か、学生であっても研究の開始前に必ず審査を受けることになっている（さらにいえば、事前に倫理研修を受けないと審査申請の資格すら持てない）。これを怠ると研究は中止を求められ、また十年前の私の研究所のように新聞等で叩かれることになる。これは国際的な潮流でもあり、患者を実験材料として酷使したり、研究結果を悪用したりした苦い過去への反省を踏まえ、法律や研究者間でのルール形成が進められてきた。こうした取り組みの歴史的な展開や国・地域間の違いを比較検討することが私の主たる関心事である。近い将来、生き別れとなった地理学の世界と融合する機会を心待ちにしている。なお、諸外国の経験に照らして考えるならば、医科学の研究倫理に関する議論が、その後の社会・行動科学の諸領域における調査・研究倫理の議論へと発展することが実に多い。早晩、地理学でも一層大きな課題となるだろう。

人生にもしやり直しがあるとしたら、また地理学教室を選ぶだろうか。少し考えてみたが、自分の場合、また懲りずに「地理学教室に入りたい」と言い出しそうな気がする。いや、すでに京大は二次試験の後期を廃止したとのことなので、後期合格組の私には居場所がないか。異なる学問領域にいながら、もし自分がいま地理学教室におれば、こんなテーマで論文を書きたい、と思うことがしばしばある（無論、そんないい加減な気持ちで

論文など書けるはずもないが). 現在の社会・政治問題に広く関係する学問領域でありながら, 教室を一步外に出れば, 地理学出身者に出会うことはおろか, 教室の存在を知る人にお目にかかる機会もまぶずない. 不思議な経験を胸に教室をそれぞれに旅立った皆さんが, 破天荒で素敵な旅路を楽しんでいることを願う.

→↑←↓→↑←↓→↑←↓→↑←↓→↑
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

秋季地理学談話会の報告

2015年10月31日, 文学部新館の地理学実習室と共同研究室で, 秋季地理学談話会を開催し, 卒業生や在学生の皆様が参加されました. 講演をしてくださった秋山元秀氏(1971年卒)や, OB交流会で講師を務めてくださった卒業生の方々に厚く御礼申し上げます.

OB交流会と講演会の報告をします.

<OB交流会>

卒業生の松尾俊明氏(JTB 関西, 1986年卒)と前田真寿実氏(京阪電気鉄道, 2013年卒)のお二人が講師を務めてくださいました. 在学当時の思い出や社会に出るまでの体験, 社会に出てからの歩みなど, エピソードを交えながら, アドバイスだけでなく温かい励ましの言葉もいただきました. 活発な質疑や意見交換があり, 楽しい交流の機会となりました.

講師の方々と司会者(朝倉慎人氏(D3)と堀川 泉氏(4回生))との間で打ち合わせして, 進行内容も企画していただきました. ありがとうございました.



OB交流会の様子



懇親会にて

<講演会>

「中国の変貌と地理学研究」

秋山 元秀(1971年卒)

日本において地理学からの中国研究は, 今日でこそ海外地域研究の一部門として

一定の勢力？をもっているが、一昔前（私が学生のころ）には全国を見てもほとんど限られた数人の研究者がいるだけで、とても勢力といえるようなものはなかった。戦後の（1970年代）京大関係では、当時の現代中国地理研究の第一人者というべき河野通博氏（1941年卒・岡山大学・関西大学、2010年逝去）と大学院に駒井正一氏（1966年卒・信州大学・金沢大学、2001年逝去）がおられた。また中国の歴史地理研究としては、人文科学研究所東方部に地理研究室があり、森鹿三氏、日比野丈夫氏という二人（いずれも東洋史卒）の所員と、地理からは船越昭生氏（1953年卒・のちに奈良女子大学）が助手でおられた。京都大学には、小川琢治氏以来の中国歴史地理研究の伝統があり、それは地理学というより支那学研究の一部門というべきであろうが、地理学を、経学・文学、宗教、天文・暦算、歴史、考古と並んで、東方文化研究の一部門として位置付けていたという点では、一つの見識によるものであるといえよう。他大学では、大阪大学に海野一隆氏（1945年卒、2006年逝去）がおられ、科学史・地図学史を専門とされていた。戦前から広く東アジアの歴史地理を研究してこられた米倉二郎氏（1931年卒・広島大学、2002年逝去）が、歴史地理学の古典的著作というべき『東亜の聚落』を刊行されたのは1960年であったが、論考の重点は日本古代の歴史地理に置かれていた。

一方、東京では多田文男氏（1900年生・東京大学卒）や保柳睦美氏（1905年生

・東京大学卒）のような戦前からの主として自然地理の研究者もおられたが、若手の人文地理研究者としては北村嘉行氏（1937年生・東京学芸大卒）、阿部治平氏（1939年生・東京教育大学卒）などが中国地理に関する著作を出しておられる程度であった。自然地理では吉野正敏氏（1928年生・東京文理大学卒）が気候学・気象学の分野で中国も含めて広くユーラシアを対象とした研究を進められており、のちに中国との交流を進める中心的役割を果たされることになる。

中国という空間的にも社会経済的にも大きな存在であるのに、戦後の日本の地理学が研究対象にしなかった（できなかった？）のかについては、おのずから一つの研究テーマになろうが、なんとといっても地理学研究を行ううえで、フィールド調査が実施できないという状況が、大きな制約になっていたことは否定できない。日本と中国の間には1972年の国交正常化以前は、政経分離の原則によって一部の貿易関係の交流はあっても、学術交流や研究者の相互訪問、ましてや外国人による地域調査などはほとんど不可能であった。国交正常化ののちも、中国側においては文化大革命が進行中であり、大学・研究機関などはいずれも機能停止の状態であった。1976年に文革が劇的に終息し、1978年の三中全会で鄧小平によるいわゆる改革開放路線がスタートしても、それが学術界にまで及ぶには時間がかかった。しかし中国への団体旅行は解禁され、それまで「友好人士」にのみ許され

ていた解放後の中国を実見する機会が一般の人々にも開かれた。

私自身が初めて中国を訪れたのは、人科学研究所の助手をしていた 1976 年 12 月～1 月の約 3 週間であった。これに始まる私自身の中国とのかかわりと日本の地理学の中国研究の歩みを、現代中国の変貌と重ねながら追ってみたい。

(1) 地理学における日中交流

戦後、中華人民共和国が成立しても、新中国の地理学者と直接交流のあった日本の地理学者はほとんどいなかったといっている状態であった。その中で貴重な交流を実現されたのが河野通博氏である。河野氏は 1964 年の北京科学シンポジウムに参加され、北京で出会ったのが呉伝鈞氏や周立三氏などの経済地理学者であった。河野氏が帰国後書かれた人民中国訪問記(『地理』9-7～11-3)には、躍進する新中国の建設への感動が、熱い筆致で描かれている。

その後、文革の中断期を経て国交回復、そして改革開放期に入ると中国における地理学会の活動も活発になり、中国地理学界の国際世界への復帰も目覚ましいものがあつた。そのリーダーは呉伝鈞氏であつた。1980 年、中国の代表団を率いて日本で開催された国際地理学会に参加した同氏の活躍は目覚ましいものがあつた。その前からすでに呉伝鈞氏と親交のあつた吉野正敏氏は、日本と中国の地理学界の組織的な交流を実現するために日本側

に一つの学会を立ち上げることを計画された。それが 1982 年に生まれた日中地理学会議である。このころは中国地理学会と直接のルートを持っている人は少なかったし、また中国から見ても日本の地理学の各分野の研究者と連絡を取ることは難しかった。少しずつ中国の研究者や学生で、日本の大学、研究機関に留学・研修する人も現れていたが、相互の情報交換もほとんどなく、日本の地理学者にとっていろいろな意味で有用な組織になることが期待されたのであつた。会長は河野氏、副会長には吉野氏が就任された。

日中地理学会議の主要な事業は、代表団の相互訪問であり、まず 1983 年の第 1 回は日本から河野会長、坂口豊氏、船越昭生氏の 3 名が訪中した。折から改革開放政策がとられるようになり、沿海地区には開放区が作られるなど、中国全体が長い閉鎖的な世界から外に向かって開かれようとしていた時期であり、学术交流もその流れの中にあつたと考えられる。

翌年の訪日団は、黄秉維理事長、瞿寧淑秘書長に加え、広州中山大学の梁溥氏、長春地理研究所所長の劉哲明氏の 4 名であつた。日本地理学会にも出席して交流を深め、シンポジウムを開催して学术交流を行うことを目指した。このころの中国では国土整治という経済開発を進めるうえで生じる国土整備が大きな課題であつた。

これと並行して中国からの様々な代表団の来日も相次いだ。四川省成都の地理研究所や長春の地理研究所代表団、また

湖北省の地理学者や国土計画担当者の視察団、河南省科学院の山地開発を課題とする視察団など、広い意味で地理に関連する課題を先進国日本に学びたいという視察団が訪れ、日中地理学会議がその接待の窓口になった。

しかし 1987 年の胡耀邦の失脚、1989 年の天安門事件の後には、それまでの開放的なムードは一変した。翌年に中国で予定されていた国際地理学会は予定通りに開催され、日中の地理学交流も再開されたが、このような代表団形式の相互訪問は、そろそろ現実にそぐわないのではないかという意見により、2007 年の訪日団をもって定期交換という形の交流は中止している。現在は、若手地理学者の日中韓地理学交流も行われており、日中地理学の交流の形は多様化し、様々なチャンネルが生まれている。

(2) 私自身の中国地理研究

私自身の中国地理研究でいえば、もともとの動機は歴史地理研究であった。卒業論文と修士論文では日本の古代と中世の歴史地理をテーマとし、DC でどのようなテーマを研究するかと考えた時、中国を研究対象にすることを考えた。日本の条里制と同じように中国にも方格地割があるのか、井田制や秦始皇帝の開阡陌などは現在の土地の上に痕跡があるのかどうかなどを調べることはできないのか、などと漠然と考えていた。

しかしまず日本と同じような地図資料

は手に入らない、現地でのフィールド調査もまずできない。それなら資史料が得やすい時代・対象を選ぶべきだと思って、近代都市としての上海に取り組んでみた。1976 年に初めて中国に行ったとき、北京のようなとりすました整然とした街ではなく、混沌の中にある上海に都市としての魅力を感じたからであった。実際の研究としては、近代都市上海が生まれる前、上海県の成立をめぐって、長江デルタの微地形や海岸線の変遷を追いながら、青龍鎮という宋代からの鎮の成立、そこから上海鎮という鎮、そして上海県という一連の地物（Landscape の訳語として考えたのだが）の盛衰のストーリーをたどったのが、「上海県の成立－江南歴史地理の一齣として」（梅原郁編『中国近世の都市と文化』京都大学人文科学研究所 1984）である。資料としては上海付近で戦時中、航空写真をもとに作られた大縮尺の地図から水路を抜き出した図を作った。

よりマクロな視点での歴史地理としては、中国のような広大な国土に様々な民族が展開し、国々が離合集散を繰り返すところでは、広い視野で、かつ政治地理的な観点から、いわば地政学的な見方が不可欠である。史記をはじめ中国の史書はそのような見方から書かれている。中国の伝統的歴史地理学の最高峰の業績といわれる顧祖禹の読史方輿紀要も、地理の変遷をこのような見方で説明している。「三国志の歴史地理－天下三分論をめぐって－」（『地図と歴史空間－足利健亮先生追悼論文集』2000）はそのような試み



講演会

の一つである。私は卒業論文で日本の古代東北を対象としたが、日本の東北や南海、中国の四夷、まとめていけば辺境の地域構造を、総合的に考えてみたいと思っている。

私の研究のもう一つの柱は、中国の地理学史、あるいは地理思想史である。書目における中国の地理書の位置づけによって、中国の学問における地理というものものの位置づけを考えてみたのが「中国の目録における地理書」（京都大学地理学教室編『地理の思想』1982）なのだが、中国の地理学はなぜ歴史学の一部として取り扱われてきたのか、歴史地理学の方法論とも関係させて考えてみたい。最近古代日本にどれほど中国の地理書が入ってきて影響したのかを考えてみたが（「中国的地理学与日本的地理学—古代中国地理書の流伝及其影響」『九州』9, 2014）、古代日本の代表的地理書とされる風土記を中国地理思想史と関係づけながら考える必要があると思っている。そういう先行

研究がないわけではないが、地理的な観点が乏しいように思う。

研究室便り

<総合博物館での 地図資料等の利用について>

総合博物館地理資料部門に収蔵されている地図資料等の閲覧・撮影などを希望される方は、他の文化史部門（日本史・考古学）同様、お手数ですが、下記の窓口までご連絡のうえ、所定の手続きをお取りくださいますよう、お願いいたします。

京都大学総合博物館 事務室

電話：075-753-3272

※地図資料のうち、所蔵機関が不明なものについては、地理学共同研究室にお問い合わせください。

電話：075-753-2793

<外国人研究者～訪問された方～>

2015年6月16日～8月18日の期間、Yu Jie（余杰）氏（Queens University）が、日本の高齢者サービスおよび関連政策を研究するため、外国人共同研究者として教室に滞在されました。7月15日、The Negotiation of Old Age and Place in Urban China: Based on the Case study of Beijing, China と題して講演していただきました。

7月23日、Liwa Pardthaisong 助教授、Ajchara Wattanapinyo 助教授ならびに Arisara Charoenpanyanet 助教授の三人が (Department of Geography, Chiang Mai University) が教室を訪問され、スタッフと相互の学術交流や学生交流の将来構想について話し合いました。

2015年12月22日～2016年12月21日の期間、丁致榮 (ジョン チヨン) 副教授 (韓国学中央研究院 韓国学大学院) が、招へい外国人学者として、近代日本人の韓国旅行記に関する研究のため、教室に滞在しておられます。

2016年2月10日、以前に招へい外国人学者として滞在された Richard Howitt 教授 (Macquarie University) が出張の途中、教室を再訪されました。



Fielding先生の講演会

4月1日～4月30日の期間、Anthony Fielding 研究教授 (University of Sussex) が、日本の国内・国際人口移動のパターンとプロセスの研究のため、招へい外国人学者として教室に滞在されました。4

月20日には、Explaining the Decline in Internal Migration Rates in High Income Capitalist Societies と題して、講演していただきました。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

<地理学教室への寄贈図書

～2015年度～>

昨年度、地理学教室にご寄贈いただいた図書の一覧です (雑誌・定期刊行物等は除く)。寄贈くださいました方々に厚く御礼申し上げます。これらの図書は、文学研究科図書館または地理学共同研究室に配置し、学生ならびに教室スタッフの研究・教育に活用させていただいております。

過去にいただいた図書も含めて、これらの寄贈図書は、皆様にもご利用いただけるようにしておりますので、どうぞご活用ください。

(図書)

- ・蒙古山水地圖／文物出版社。
- ・草原と都市 変わりゆくモンゴル／風媒社
- ・台頭する新経済空間 (現代インド 4)／東京大学出版会
- ・西洋人の描いた日本地図／ドイツ東洋文化研究協会
- ・ひとりぼっちの海外調査／文芸社
- ・自然のしくみがわかる地理学入門／ベレ出版
- ・高山植物の自然史／北海道大学図書刊行会
- ・高山植物と「お花畑」の科学／古今書院
- ・植生環境学／古今書院

- ・アフリカ自然学／古今書院
- ・神秘の大地，アルナチャル／昭和堂
- ・シーボルトが紹介したかった日本／国立歴史民俗博物館
- ・地理学のすすめ／丸善出版
- ・保健師：地域の健康をつむぐそのはたらきと能力形成／ふくろう出版
- ・特別展 上杉家伝来絵図／米沢市上杉博物館
- ・タウンシップ 土地計画の伝播と変容／ナカニシヤ出版
- ・岩手キャベツ物語／キャベツの歴史と復興録出版実行委員会
- ・総合生存学 グローバル・リーダーのために／京都大学学術出版会
- ・観光の地理学／文理閣
- ・北陸新幹線沿線パノラマ地図帖／能登印刷出版部
- ・大京城府大観／ソウル歴史博物館
- ・徳川日本の家族と地域性／ミネルヴァ書房
- ・田邊府志・田邊舊記 全／世界聖典刊行協会
- ・平成 27 年度特別展 近世狭山池絵図／大阪府立狭山池博物館
- ・立正大学地理学教室 90 周年記念誌／（記念事業実行委員会）
- ・日本古代の交通・交流・情報 1 制度と実態／吉川弘文館
- ・アンデス自然学／古今書院
- ・ナミビアを知るための 53 章／明石書店
- ・人間の営みがわかる地理学入門／ベレ出版
- ・五十周年記念 二十一世紀の東南アジア研究／京都大学東南アジア研究所
- ・*Urban geography of post-growth society* / Tohoku University Press
- ・*International migrants in Japan* / Kyoto University Press
- ・*Aging, disease and health in the Himalayas and Tibet* / Rubi Enterprise
- ・*Himalayan Nature and Tibetan Buddhist Culture in Arunachal Pradesh, India* / Springer
- ・*CSEAS Center for Southeast Asian Studies Kyoto University* / 京都大学東南アジア研究所
- ・*CSEAS 50th ANNIVERSARY From Southeast Asia to the World* / Center for Southeast Asian Studies Kyoto University
(雑誌)
- ・茨城地理 第 16 号
- ・エネルギー史研究 no.30 (九州大学記録資料館)
- ・えりあぐんま 第 21 号 (群馬地理学会)
- ・オーストラリア研究紀要 第 41 号 (追手門学院大学)
- ・お茶の水地理 第 53 号
- ・海洋地質図 no.85, 86
- ・関西学院史学 第 43 号
- ・京都産業學研究 (龍谷大学・京都産業学センター)
- ・京都府漁協だより 第 9-14 号 (京都府漁協組合)
- ・京都ラテンアメリカ研究所紀要 No.14 (京都外国語大学)
- ・空間・社会・地理思想 第 19 号 (和歌山大学・大阪市立大学)
- ・駒澤地理 第 51 号
- ・しま no.241-5 (財団法人日本離島センター)
- ・人文学部紀要 第 35 号 (神戸学院大学人文学部)
- ・人文地理学研究 第 21 号 (東京大学)
- ・石炭研究資料叢書, no.36 (九州大学記録資料館)
- ・地域学研究 第 29 号 (駒澤大学)
- ・地域研究 vol.55, no.1, 2 (立正地理学会)
- ・地域研究年報 37 (筑波大学人文地理学・地誌学研究会)
- ・地域と環境 No.13 (京都大学大学院人間・環境学)

- 研究科)
- ・地域と社会 第 18 号 (大阪商業大学比較地域研究所)
 - ・地域防災 創刊号 (一般財団法人日本防火・防災協会)
 - ・地學雜誌 vol.124, no.2-6, vol.125, no.1
 - ・地図情報 vol.35 no.1-3 (地図情報センター)
 - ・地理 vol.60, 4-12 月号, vol.61, 1-4 月号
 - ・地理学研究 第 43 号 (駒澤大学大学院地理学研究会)
 - ・地理学評論 vol.88, no.3, 4, 5, 6, vol.89, no.1-2
 - ・地理学報告 第 117 号 (愛知教育大学地理学会)
 - ・地理誌叢 第 57 卷第 1 号 (日本大学地理学会)
 - ・地理歴史人類学論集 6 号 (琉球大学法文学部)
 - ・砺波散村地域研究所研究紀要 第 32 号
 - ・東北学院大学論集 歴史と文化 第 53 号
 - ・東北大学理科報告 第 7 輯 (地理学) vol.61, no1
 - ・東北文化研究所紀要 第 47 号 (東北大学)
 - ・奈良大地理 第 21 号
 - ・人間科学 第 32 号 (琉球大学法文学部)
 - ・人間文化 H&S 37-38 (神戸学院大学人文学会)
 - ・日本海地域の自然と環境 第 22 号 (福井大学地域環境研究センター研究紀要)
 - ・広島大学現代インド研究 空間と社会 Vol.6
 - ・文化史學 第 71 号 (同志社大学・文化史学会)
 - ・待兼山論叢 日本学篇 49 (大阪大学大学院文学研究科)
 - ・山形大学紀要 (社会科学) 第 45 卷第 2 号, 第 46 卷第 1-2 号
 - ・立命館地理学 27
 - ・理論地理学ノート No.16, 17 (首都大学東京)
 - ・歴史人類 第 43 号 (筑波大学大学院人文社会科学研究科)
 - ・歴史地理学野外研究 第 17 号 (筑波大学人文社会科学研究科)
 - ・早稲田大学大学院教育学研究科紀要 no.26, 別冊第 23 号-1-2
 - ・CSEAS NEWSLETTER, No.71-72 (京都大学東南アジア研究所)
 - ・SOUTHEAST ASIAN STUDIES, vol.3, vol.4, no.1-3 (京都大学東南アジア研究所)
 - ・ASIAN AND AFRICAN AREA STUDIES, no.14-1, 2 (京大アジア・アフリカ地域研究研究科)
 - ・2014 JAPANESE PROGRESS IN CLIMATOLOGY (法政大学気候学談話会)
 - ・Tsukuba geoenvironmental sciences, vol.10
 - ・Southeast Asian Studies 東南アジア研究 vol.53,no.1-2
 - ・GEOGRAPHICAL REPORTS OF TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY, No.50
 - ・MEDITERRANEAN WORLD, XXII 地中海論集 (一橋大学地中海研究会)
 - ・AFRICAN STUDY MONOGRAPHS, vol.36 no.2 ~ 5, vol.37, no.1
 - ・AFRICAN STUDY MONOGRAPHS, Supplementary Issue no.52 (報告書)
 - ・地域調査実習報告書「京都・滋賀」(金沢大学人文学類)
 - ・京田辺市飯岡区 調査報告書 (京都府立大学)
 - ・学術研究助成報告集 第 2 集 (国土地理協会)
 - ・ANNUAL REPORT OF THE MURATA SCIENCE FOUNDATION, No.29 (村田学術振興財団)
 - ・高知県土佐市の地理 地理学実習報告書(40) (関西大学)
 - ・大津湖南地域における今後の交通政策に関する学生グループワーク研究 論文集・報告書 (滋賀県土木交通部交通戦略課)
 - ・歴史地理学実習報告 第 14 集 (三重県志摩市) (筑

波大学人文文化学群)

・歴史地理学実習報告 第 15 集 (千葉県勝浦市) (筑波大学人文文化学群)

<研究室の動静>

教室の事務は、引き続き三上純子さん
にお願いしております。

本年度は、大学院博士後期課程 3 名、
修士課程 7 名、学部 4 回生 15 名、3 回
生 16 名、研究生 2 名が在籍しています。

<新メンバーの自己紹介>

本年度は、新たな顔ぶれとして、3 回
生 15 名、博士後期課程 1 名、修士課程
1 名 (アジア・アフリカ地域研究研究科
より転研究科)、研究生 2 名 (うち 1 名は
昨年 10 月より在籍) を迎えました。昨年
休学していた 1 名を含めて、皆さんに簡
単に自己紹介していただきます。

(3 回生)

石崎 楓

アジアや日本の中山間地域に滞在した経
験から、まず地球環境を科学的に理解し
たいと考えています。特に熱帯アジアの
植生とその利用に関心があります。また
富山県南砺市という過疎地域の出身でも
あり、地理学的に地元を見直してみたい
なども思っています。

一杉 将生

本年度より地理学専修に分属されること

となりました。新 3 回生の一杉将生です。
興味があるのは自然地理学ですが、知識
も浅いので幅広く学習していけたらと思
っています。よろしくお願いします。

川上 大介

地理学専修新 3 回生の川上大介です。出
身は名古屋ですが、昔海外で暮らしてい
たことがあります。自慢は名前の総画数
が少ないことで、プラモデルを作るのが
好きです。今年はいろいろなことに挑戦
したいと思っています。よろしくお願いします。

楠原 弥沙紀

はじめまして、楠原です。神戸市のお隣、
金物の町、三木というところからやって
参りました。あちらこちらをふらふらす
るのが好きです。生きている間に全都道
府県制覇したいと思っています。地理
学に関してまだまだ分からないことが多
いので、ご指導いただけると幸いです。
よろしくお願いします。

久保田 貴大

三回生の久保田貴大です。教育の地理的
・経済的格差の問題について興味があり、
また自身も高校教員になることを目指し
ています。大阪府出身であるため、大阪
の地理的な特徴等についても目を向け、
知識を得られればと考えています。よろ
しくお願いします。

正垣 萌生

はじめまして、正垣萌生と申します。出身は滋賀県で、部活はオーケストラに参加しています。インドア派で、勉強熱心でもないですが、これから地理に馴染んでいこうと思いますので、よろしく願いいたします。

炭多 大輝

3回生の炭多です。色々な地域のことを知ったり、見たり、歩いたりするのが好きです。大学生のうちに世界の全大陸に行ってみたいです。

田島 彩花

3回生の田島彩花です。出身は佐賀県です。みかんと佐賀牛が美味しいです。サークルは民族舞踊をやっている、世界のいろんな国の踊りを踊っています。1週間踊らないと体がうずうずしてくる程度には踊りが好きです。よろしく願いします。

東條 一馬

今年度より地理学専修に分属となった東條一馬です。出身は奈良県で、趣味はサッカー観戦などです。まだ具体的な関心は定まっていないですが、地理学やその周辺分野の最新の理論的成果が現代思想に対して持つ射程に興味があります。よろしく願いいたします。

戸ヶ崎 優子

初めまして。地理学専修 3 回生の戸ヶ崎

優子です。趣味はコーヒーを淹れることとパン屋巡りです。卒業までに京都の有名どころは制覇します！ 隠れ鉄なので新幹線に乗って大好きな東京に帰省するのが至福の時間です。将来は都市開発に携わりたいと思っています。よろしく願いします。

贄川 大

はじめまして、贄川大です。贄の字は生け贄のにえです。下の名前はひろしと読みます。まさるではないです。唯一自慢できるところは鼻が高いことで、直角二等辺三角形の鼻と言われたことがあります。こんな自分ですが、よろしく願いします。

西置 彩佳

限りなく奈良に近い京都に住んでいます。大学生の間に 47 都道府県を網羅すべく、休みはほぼ毎週旅行に行っています。サークルでは能楽をやっているの、謡って！と言ってもらえればいつでもうたいます。これからよろしく願いします。

松井 大樹

今年から地理学専修でお世話になります、松井大樹です。福岡出身で地元が好きです。地理の様々な分野で専門的なことを学びたいと思っています。よろしく願いします。

松本 優希

松本優希（まつもと ゆうき）と申しま

す。出身は大阪の高槻です。旅行中に知らないおじさんから、稚内では水族館デートに、鹿児島ではディナーとお墓参りに誘われました。おじさんフェロモンが強いかもしれません。よろしく願います。

棟安 拓未

3 回生の棟安拓未です。兵庫県姫路市出身です。高校時代は地理を選択していませんでしたが、幼い頃から地図を見ることが好きで、専修選択では迷わず地理学を選びました。深い知識は持っていませんが、歴史地理学に興味があります。

山口 凜

埼玉県出身の山口凜です。野山へフィールドワークにガンガン出かけていきたいので、地理学専修を選択しました。自然地理がもっと流行ればいいのにな。と思っています。どうか仲良くしてください。よろしく願います。

(修士課程)

大谷 侑也

初めまして新修士 2 回生の大谷侑也です。出身は大阪の天王寺です。アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻より転研究科して参りました。ケニア山の氷河の縮小に関する研究を行なっています。地理学的な知識は乏しいので色々教えて下さい。どうぞ、宜しく願います。

(博士後期課程)

芝田 篤紀

この度、地理学専修で学ばせていただくことになりました、芝田篤紀と申します。以前はアジア・アフリカ地域研究研究科にて、ナミビア北東部に暮らす狩猟採集民と自然環境の関係について調査・研究しておりました。これからどうぞよろしく願います。

(研究生)

David Rajh

国費留学生のライヒ・デイビットと申します。スロベニア出身です。趣味は外国語を学ぶこととサッカーを見ることです。子供のころから地理学に深い興味を持っています。特に居住地域や大気汚染などに関心があります。よろしく願います。

馬 可越

馬可越と申します。中国北京から来ました。趣味は料理と歌を歌うことです。大学出身校は北京外国語大学で、日本に来る前に四年間日本語を勉強しました。これから大学院生を目指して頑張りたいと思います。よろしく願います。

<2014年度の実習旅行>

2015 年度は、10 月 26～29 日まで、京都府舞鶴市において、2 回生・3 回生の計 15 名が調査を行い、報告書を作成しました。

〈学部卒業生・院生の進路〉

* 学部卒業生

岡田 眞太郎 文学研究科 (修士課程)
 橋詰 奈央 西日本旅客鉄道 (株)
 野口 峻哉 ヤマトロジスティクス (株)
 猪原 章 文学研究科 (修士課程)
 太田 紘子 兵庫県庁
 桑林 賢治 文学研究科 (修士課程)
 小柴 藍子 ---
 末岡 奈緒子 東京高等裁判所
 谷本 沙織 三井住友カード (株)
 堀川 泉 文学研究科 (修士課程)

* 修士課程

佐々木夏妃 エン・ジャパン (株)
 熊野貴文 文学研究科 (博士後期課程)

(思修館)

佐伯 直樹 (公財)日本離島センター

* 科研研究員

山科千里 筑波大学生命環境学群
 藤田知弘 国立環境研究所

〈院生・研究員の研究状況の報告〉

今年度までの院生の研究状況を報告します。以下は、閲読を経た論文のリストです。

D 3 朝倉 慎人

・生活空間への観光のまなざしと住民の対応－徳島県三好市東祖谷地区を事例

として－, 人文地理, 66-1, 16-37 頁 (2014)

D 1 熊野 貴文

・大阪大都市圏郊外における戸建て住宅地の変容－近鉄学園前駅周辺の住宅地の事例－, 人文地理, 66-4, 46-62 頁 (2014)

M 2 谷本 涼

・京都市のタクシー業界による移動サービスの多様化, 人文地理, 67-3, 252-266 頁 (2015)

〈2015年度講義題目〉

* 講義 (系共通科目) *

水野一晴・石川義孝 地理学概説

* 特殊講義 *

教授 石川義孝 人口減少時代の日本における地理学的課題の検討

教授 田中和子 近代地理学と科学をめぐる諸相－リヒトホーフエンとヘディンを中心に－

教授 水野一晴 世界の自然環境と人々の生活

准教授 米家泰作 山と森の歴史地理(後期1) / 近代日本の植民地と地理的知(後期2)

人環教授 小島泰雄 中国農村の生活空間研究(前期) / 中国における都市農村関係(後期)

人環教授 小方 登 地理情報
・衛星画像の処理・

分析の基礎（前期）

人環准教授 山村亜希 中近世移行期に
おける城下町の景観（前期）
／中近世都市を読む・歩く
（前期・集中）

AA 研准教授 大山修一 アフリカの自
然と社会に関する基本知
識と技能（前期）

防災研准教授 松四雄騎 自然地理学の
応用としての斜面減災論
（前期・集中）

理学研究科准教授 堤 浩之 地形学
（学部）（後期）

講師 水内俊雄 都市理論と社会保障の
地理学の実践：社会的企業・NPO
研究と都市の再生（前期）／都市
空間史と都市の政治地理：場所の
政治を考える（後期）

講師 川端基夫 グローバリゼーション
と地域暗黙知（前期1）／場所の
チカラと立地戦略（前期2）

講師 加賀美雅弘 民族に着目した EU
地誌（前期・集中）

講師 池口明子 湿地漁業の地理学
（後期・集中）

※（演習／20世紀学科目と共通）
客員准教授 上杉和央 戦争の記憶の現
在（前期）／20世紀へ
のアプローチ～景観調
査を通じて～（後期）

＊演習Ⅰ—地理学研究法—＊
石川義孝・田中和子・水野一晴・米家泰作

＊演習Ⅱ—4回生演習—＊
石川義孝・田中和子・水野一晴・米家泰作

＊講読＊

教授 石川義孝 英語地理書講読
教授 田中和子 ドイツ地理書講読
文学研究科教授 小山 哲 フランス
地理書講読（前期・後期）
人文研助教 森川裕貫 中国地理書講読
（前期・後期）

＊地理学実習＊

石川義孝・田中和子・水野一晴・米家泰作

＊大学院演習—地域の諸問題—＊

石川義孝・田中和子・水野一晴・米家泰作

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

事務局から

<地理学談話会2015年度会計報告>

（2015年4月1日～2016年3月31日）

【資金会計】

<収入>

年会費	71,000
寄附金	0
利子	53
前年度繰越金	367,170

計 438,223

<支出>

運営への振替	96,863
郵便振替手数料	5,130
次年度への繰越	336,230

計 438,223

【運営会計】

<収入>

資金会計からの振替	96,863
秋季懇親会会費	60,000
春季懇親会会費	139,100

計 295,963

<支出>

秋季懇親会	56,674
講師3名交通費	4,000
OB交流会経費	0
春季論文発表会経費	139,100
会報・名簿等印刷費	14,000
会報製本費用	0
通信・文具等費	82,189
弔電・供花等	0

計 295,963

<訃報>

前回の会報以降、次の方々がお亡くなりになりました（お亡くなりになったとのお知らせをいただいた方を含みます）。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。（確認分、括弧内は卒業年、敬称略）

<訃報>

川副 昭人（1954年卒）
木下 良（1953年卒）
西川 栄一（1935年卒）

<住所不明者についてお願い>

以下の会員の住所が不明です。ご存じの方は、談話会事務局までご一報ください。（数字は卒業年、敬称略）

安福 伸光	（1997年卒）
池内 麟太郎	（1973年卒）
石角 強	（1970年卒）
石橋 弘嗣	（2006年卒）
石原 大嗣	（1997年卒）
石原 美歩	（1995年卒）
石田 陽介	（2002年卒）
石村 裕輔	（1992年卒）
今井 平八	（1944年卒）
岩部 敏夫	（1991年卒）
上田 直人	（2009年卒）
内山 隆之	（1987年卒）
江下 以知子	（1997年卒）
江崎 健治	（1992年卒）
遠藤 元	（1996年卒）
遠藤 正雄	（1978年卒）
太田 隆文	（1997年卒）
大野 宏	（1992年卒）
大山 晃司	（1995年卒）
岡本 靖一	（1967年卒）
岡本 美津子	（1987年卒）
興津 俊之	（1991年卒）
小口 稔	（1991年卒）
楓 雅之（泰昌）	（1945年卒）
片寄 弘也	（2004年卒）
勝村（赤座）眞知子	（1973年卒）
叶谷 房子	（1998年卒）
川合 大地	（1998年卒）
川添 和明	（1995年卒）

貴志 謙介	(1981 年卒)	福田 新一	(1971 年卒)
木地 節郎	(1949 年卒)	古川 昇平	(2006 年卒)
北口 卓美	(1990 年卒)	前田 奈実	(1999 年卒)
木村 宏	(1949 年卒)	松本 弘史	(1983 年卒)
木村 洋之介	(1949 年卒)	御手洗 央治	(1993 年卒)
久保 智祥	(2003 年卒)	宮澤 博久	(2005 年卒)
西井 理子	(2002 年卒)	宮原 耕一	(1994 年卒)
坂部 誠治	(1991 年卒)	保江 志帆	(2003 年卒)
鷺谷 克良	(1963 年卒)	山口 一郎	(1980 年卒)
指尾 喜伸	(1988 年卒)	山口 秀樹	(1997 年卒)
島崎 郁司	(1996 年卒)	山下 良	(1989 年卒)
嶋野 浩一郎	(1997 年卒)	山田 潤哉	(1997 年卒)
清水 究吾	(1998 年卒)	山田 (児玉) 憲子	(1970 年卒)
新谷 泰久	(1990 年卒)	山田 浩子	(2000 年卒)
鈴木 伸国	(1988 年卒)	山中 一高	(1991 年卒)
田島 渡	(1948 年卒)	吉岡 朝日	(2003 年卒)
田辺 賢一郎	(1949 年卒)	吉野 修司	(1995 年卒)
田村 麗花	(2014 年卒)	吉村 健志	(2002 年卒)
都子 屋	(1940 年卒)	六嶋 美也子	(1993 年卒)
厩田 剛	(2014 年卒)	渡邊 克己	(2004 年卒)
長尾 拓磨	(2013 年卒)		
中山 耕至	(1993 年卒)		
那須 久代	(1988 年卒)		
檜崎 こず恵	(1998 年卒)		
南部 一寿	(1999 年卒)		
西尾 正隆	(1970 年卒)		
西沢 仁晴	(1974 年卒)		
西山 隆彦	(1995 年卒)		
能勢 (朝倉) 正寛	(1962 年卒)		
野瀬 美咲	(2010 年卒)		
林 洋子	(1965 年卒)		
原 健太	(2003 年卒)		
原 潤	(1997 年卒)		
平井 素子	(1996 年卒)		

＜オープンキャンパス：2015年度の 報告と2016年度のお知らせ＞

2015 年 8 月に京都大学のオープンキャンパスが開催されました。文学部の見学・説明会もこの一環として、6 日に行われました。文学部の全体説明のあと、各自が希望する専修の研究室を訪問してもらいました。

2016 年度の京都大学主催の全学オープンキャンパスについては、

<http://www.kyoto-u.ac.jp/> をご覧下さい。
文学部の見学・説明会は、8月9日(火)
の予定です。

地理学教室では、大学院の受験志望者
や、中学高校の教員の方々、また、一般
の市民の方にも参加して頂けるような見
学会を11月26日(土)に開催する予定
です。詳細な日程や参加申込の案内は、
地理学教室のホームページ、
http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geography/geo-top_page/
に掲載する予定ですので、ご覧下さい。

<2016年度秋季地理学談話

のお知らせ>

本年は、下記のようなプログラムを予
定しております。ぜひお越しください。

記

日 時：11月26日(土)

午後1時—5時

場 所：文学部新館

◎教室見学会：午後1時より

◎OB交流会：午後2時より

講師 郡田 篤 氏(2001年卒)

北川 哲也 氏(2001年卒)

(文学部新館 地理学実習室)

◎講演会：午後3時半より

長谷川 博幸 氏(1971年卒)

(文学部新館 地理学実習室)

◎懇親会：午後5時より

(文学部新館 地理学共同研究室)

<地理学教室所蔵の

写真資料について>

地理学共同研究室や総合博物館地理作
業室のロッカーの中に保管されていた地
理学教室関係者の古い写真が数百枚あり
ます。

卒業生の方々に見ていただき、写真に
関する情報のご提供や、整理方法のご教
示などをいただければと願っております。

どうぞ、お気軽に教室をお訪ねいただ
き、アルバムをご覧くださいませよう、
お願い申し上げます。

<地理学談話会名簿改訂の

お知らせとお願い>

本年度は、名簿改訂の予定です(9月発送予定)。恐れ入りますが、必ず、同封のはがきにて、ご連絡先等をお知らせください。準備と印刷の都合上、6月末必着でお送りくださいますよう、お願いいたします。

なお、お寄せいただいた情報は、会員名簿の作成および談話会・地理学教室から会員の皆様へのお知らせやご案内等のみに活用いたします。どうぞ、ご了解くださいますよう、お願い申し上げます。

☆一年あたり千円を目処として、それぞれの会員の方々に、談話会の運営経費へのご協力をお願いしております。随時、ご支援をお願いいたします。納入の際は、同封しております「郵便振替用紙」をご利用下さい。

京都大学文学部地理学談話会 会報 第 27 号

発行日 2016 年 5 月 15 日

発行者 地理学談話会

〒 606-8501

京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 地理学教室内

TEL: 075-753-2793 (直通)

発行所 京都大学文学部地理学教室

URL http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geography/geo-top_page/